

「もっとお替わりしてくれ！」

～被災地、炊き出しの現場から～



4/24(日)朝5時、まだ暗い中、約800食のカレーとナンをトラックに積み、シディーク炊き出し車は東京を出発した。目指すは、石巻市河南町湊小学校。津波による甚大な被害を受けた石巻港の近くだ。

東京を離れ福島県に入った辺りから、高速道路とはいえど、ひび割れやズレ、ゆがみなどが目につく。50km/h規制がひかれ、行き交う自衛隊の車両が多い。途中、仮設住宅の資材運搬と思われるトラックが30台ほどの隊列している場面にも遭遇した。

11時、石巻市に入る。3キロほど進み、石巻港付近に入った途端に風景は一変。被害は酷く、辺り一面瓦礫の山。その周りで普通に遊ぶ子供の姿。言葉にならない。信号は未だ止まったままで、警官が交通整理をしていた。

途中、トラックのタイヤがパンクするアクシデントもあったが、なんとか12時には目的地の小学校へ到着。朝方の大雨の影響で、周囲のいたるところにぬかるみができていた。自衛隊の誘導を受け、体育館脇に駐車する。隣には墓地があるが、墓石はなぎ倒され、その上に潰れた車が覆い重なっていた。信じがたい光景。



体育館に入り、すぐに炊き出しを開始。弊社代表ラムザンシディークをはじめ、同行のパキスタン大使やその一行も自衛官と一緒にあって、全員でカレーとナンを配布した。

被災した方の列が、すぐにできる。
「何人分ですか？」「～人分をお願いします」
取りに来る方の申告数が多いほど、家族の方が健在であると感じ、一瞬ホッとする。

今回初めてナンを食べる方も多く、その分受け渡し時にコミュニケーションを取れたような気がする。
「もっとお替わりしてくれ！」、「もっと大人数の分を取りに来てくれ」
そんな気持ちで、カレーを手渡していた。

2時頃、炊き出しを終了。夢中で炊き出し作業を行っていたため見えていなかった現状が、次第に目に飛び込んでくる。体育館内の一角には、山積みされた支援物資。ひっきりなしに届いているようだが、それを配布する人員は足りているのだろうか。避難所とはいえ、海に近いことから体育館にも身の丈以上の水の跡が残っている。これまで使われていたであろうトイレも天井まで泥を被っていて、仮設トイレしか使用できない。そして、始終漂う異臭。これから暖くなる中で、衛生状態は大丈夫なのだろうか。

出発の時刻が迫ってきた。車の中から改めて周辺地域の景色を見る。周囲の電柱には電力会社の方があちこちで登り、復旧作業をしている。だが、瓦礫にはほとんど手がつけられていない。復興まで、一体どれだけの時間が掛かるのか。

—これからも続くであろう長い避難生活の中で、たったの1食分しか提供することが出来なかった。
いつもと違うパキスタンのカレーとナンで、どれだけ被災者の方々に喜んでもらったのだろうか—

次々と頭をよぎる想いは、現場を離れても消えることはない。まだまだ落ち着かない被災地で、これから本当に必要としている支援の形は何だろう。実際に行かなければ、そこまで考えられてはいなかった。節約をして、物や金銭を送ることも必要だが、やはり人の力がまだまだ足りていないと痛感した。